

京都、2001年8月14日

オリビエ、

今日は京都の西にある大山という標高約1730mの山に上った。地理学的には若い山で、山腹は若い女性のそれのように切り立っており、上ると疲労し、息が切れる。

大山はもともと古来からの多くの神社が連なっているところで、神社の周辺には古い石や文字がすりきれて読み取れない墓石がみられ、巨大な百年以上の木々の根元には苔がむしている。

あちらこちらで、全てを濡らす水の音がし、水浸しの光景となる。過去がよみがえり（それとも僕が行ったのか）その深底から時間が吐き出したような「美しい」石をじっとながめっていると、僕は石に内在する時空を越えた「存在の静寂に」捕らわれる。いつまで続くとわからない濡れた山道を歩いた末、越上山（おがみやま）寺へ着く。

この寺はまるでとらえ所のないもの、クールベの言う「世界の起源」、あるいはニューマンの言う「ジップ」の上に開かれた脚のように現れ、灰色の木材でできている。指で撫で、触り、叩いたりしたのだろう、木のえぐれている部分から木材は指でこすられてつるつるになったことが分かる。

「私は草の上に横になった。平らな石の上に頭をのせ、天の川を振り仰いだ。星の精液と天の尿が星座の天空を横切るようにうがった不思議な穴。この天頂に空いた亀裂は無限の広がりの中できらめくようになったアンモニア蒸気がどうも形成しているらしい。静まり返ったなかに響き渡る雄鶏のさげびのようにアンモニア蒸気は虚ろな空間の中で引き裂きあう。卵、えぐられた目あるいは石に張り付いた輝く私の頭がい骨は、相似形の映像を無限に送り返し続けた。吐き気がする」 眼球譚 p. 136 ジョルジュ・バタイユ

それらすべてのジャングルは純粹すぎてそのため墮落しているが、その奥には巨大な丸い鐘がある、冷たい水で手を洗った後、横に着いている棒で鐘を突くと空洞の音が響き渡る。叫びをあげたいと思っている神の神秘的なクリトリスのようだ。僕はあっけにとられていた。

友情をこめてエリック